

## 補章 毛沢東共産主義の形成

### (1) 中国の伝統と精神性

中国は徹頭徹尾、肉体と現実の国である。魯迅が、道士が憎まれない理由がわかれば、中国の大半がわかったことになる、といったのもそのことと関係あるはずである。にもかかわらず、中国的世界とは何かということになると、何よりもまず、その精神性を挙げねばなるまい。ただし、精神性を狭義に解することは許されないので、多義的に解釈する必要がある。精神とは即ち精神の変容を指すのであって、字義通りの精神性の他、①自然性②総合性③政治性をも包括するのである。

①自然性とは放任性でもある。アナキスト劉光漢は「中国数千年来の政治は儒家道家の学説

から出発しており、儒・道家の学説は放任を重んじている。したがって中国の政治は放任を重んじて干渉を重んじない」（『社会主義講習会第一次開会記事』）と述べている。つづけて劉は「上は下に対して、あたかも草木鳥獣のごとくに見做してその自生自滅にまかせ、下は上に対して、あたかも悪鬼邪神のごとくに見做して、近づくことはしても親しむことはできないと思っている」とも述べている。普通には孔老は対立せしめられ、一方は「人為」であるのに対して、他方は「無為」とされているが、根源的には両者とも「精神性」を尊ぶことで、さほど差があるわけではない。このように中国二千年の歴史を覆っているものは、自然性、放任性なのである。

②精神性は総合性でもある。毛は文革の際楊献珍の「合二而一」（二つを一つにする）に反対して「一分為二」（一つを二つにする）を主張したが、これは如何にも毛らしい分析と闘争の強調に他ならない。しかし毛自身の総合的性格は否むべくもなく、「合二而一」の思想は実に中国民族の根幹をなしているといっている。古くは諸子百家の百科全書的トータルリズムも、『論語』にある。このように、西欧人が個人中心の「パーソナルな発想」であるのに対し、全体的な「トータルな発想」が中国人のものといえる。中国人の家族と子孫の繁栄を願う気持の

強さは、他と比較にならないが、この共同体膨張の觀念の源も、この総合性と関係がある。

④精神性の延長するところで、政治性となる。政治性というと、日本ではすぐに具体的現実と結びつけるのであるが、中国ではそうではない。西欧が客観政治的であるのに対し、中国政治においては主観政治的である。いわゆる徳治主義ともいわれるのがそれで、中国では客観的現実の処理のための具体的提案である代りに、絶えず君主の具体的現実への処し方として現われる。中国政治の意識は、政治に対する階級自体の法的及び道德的規定の形をとる。政治される階級を対象とする場合にも、政治の主体が政治の客体に向かっていかなる態度・方法をとるべきかを規定するのである。孔子は「徳をもって治める」といい、老子は「暴に報いるに徳をもってする」をすすめたのである。現今の「政治優先」もここに端を発する。この場合の政治とは、具体的有効性であると同時に思想性↓主観性を意味するのであって、それは直ちに中国古来の政治的意味あいにつながる。

中国アナキズムの精神的地盤はここにある。アナキズムを概括表現するとすれば、西洋的であるよりは東洋的である。東洋の世界においてアナキズムであるとすれば、実に中国におけるアナキズムの根は深いということになる。したがってマルクシズムにおいても、中国の伝統性からして、李大釗―彭湃―毛沢東の主観的マルクス主義の流れこそ、本道であるといえるのである。

ある。中国人の一番納得しやすいマルクス主義である。しかも劉少奇その他の対立者といえどもそれを免れているというわけではなく、むしろ劉少奇「共産党員の修養」にみられるように、より濃厚に伝統的政治世界が現われているのである。

中国全土を覆うこの精神性において、現代中国もまたその対応策を編みださざるを得ない。中国歴代の官の思想として儒教がとられた理由もそこにある。中国においては裏の思想が道家で表の思想が儒家であり、両家で成りたっているといわれる。両家是对立しているようで、互いに補完的な関係をなしているのである。また大同理想という点では互いの共通項を持っている。

このような二つの互いに併存的な関係は、社会機構にも現われる。君主と民衆、強権と放任という関係である。下が自由放任だから、自然上は絶対強権であらざるを得ない。逆に絶対強権は、自由放任によって保たれている。民衆が太古自然の如くおだやかに暮していれば、君主はそれに干渉する必要はない。その意味ではアジア的専制主義といわれるものは、半面において甚だ平和的なものであるといえる。そこに徳治主義が生れる。具体政治の必要がないから、君主は身を修めていさえすれば、それでよかったですのである。中国における絶対権といわれるものは、むしろ下部にあり、それは宗族長（家父長）であった。しかもその宗族長においても、

宗族長であるが故に絶対権と同時に、宗族の保護者としての役割が非常に濃いのである。

この自由放任と絶対強権の関係は、ロシアにおいてもみられるようである。ロシアにおいては自由といえは常に無政府、放縦を意味することが多く、他方権威は常に専制主義ツァーリスムたらざるを得なかった。ロシア語で自由を意味する語「ヴォーリヤ」は単に鉄鎖のみならずいかなる社会的束縛にも拘束されずに、自己の思い通りに生きる可能性を内包しているのだそうである（勝田吉太郎）。それ故に十八世紀に至るまでロシアでは終始ツァーリズムのむき出しの強権と、他方では強圧に対する無秩序な叛逆（ステンカ・ラージンやプガチョフの叛乱）や逃走（コサック）に終始していたのである。これは広大地域を支配するものの共通性といえようか。（ただしアナキズムといえはラテン民族に代表されるが、小国といえども民族性によって放縦と強権軍事政権の関係が生れる。中国民族自体のラテン的共通性もある。）

実際中国におけるこうした自由放任と絶対強権の相矛盾するものの両立は、中国を訪れたものの誰しもが感じる筈である。そのあまりの特異さ、奇妙さに、説明のことはに窮して多くの人が、その一面だけを強調するか、さもなければことを失って何も語らない。私自身もそのことを痛切に感じた。香港から広東へ入って、最初の印象がそれであった。それによって私は初めて中国をみた思いがしたことである。中国では引潮のような、巨大な遠心力が働いている。

それを広東の、どこへ行くともなく互いに無関係に、しかも黙々として歩いていく民衆の中にも、みることができた。日本の街頭からすれば、それは実に不思議とも奇妙とも思える雰囲気、通行人の流れの一定した方向性が感じられないのである。駅のすぐ近くにスラム街の通りもあつたりして、われわれ訪中団は息をのむ思いで、バスの中から中国の顔をまじまじと眺めているものである。

そしてホテルの室へ着くと、十数分間の甚だしい緊張の反射としてか、中国現指導部が躍起になって努めていることの意味がやっと読めてきたのである。通行途中のスローガンには「團結緊張 嚴肅活発」「勤儉節約」等があるが、この国では、なかなんぞこの酷熱の広東では、そうした人間の緊張を促す呼びかけをせざるを得ないのである。「團結」などという、マルクス主義における常套語のようにみえて、実はそうではなく、それは新生中国としては切実なスローガンなのである。それなくして再び中国は元へ戻ってしまうといった態の深刻なテーマである。スローガンの一つ一つが、動かしようのない現実的なものとして実感させられてきたのである。そしてそこにおいて、再び満ち潮のような求心力をもまた感じざるを得なかった。引潮が巨大だけに、満ち潮もまた巨大な力を持っている。中国の幹部が時々、外人の耳には必要以上に聞えるほどの大声をはりあげる理由も得心させられた。

中国には「一盤散砂<sup>イワンサツサン</sup>」ということばがあるが、これは中国人が皿の上の砂みたいな存在であることをいっただけのものである。この砂のような中国民衆を粘土のようにまとめること、それが中国歴代の王朝の願いであった。そしてそのためにこそ、王は巨大な権力機構↓官僚制を必要としたのである。

中国近代化の父、孫文はそのことをよく知っていた。孫文はその著『三民主義』にいう。「中国には自由が多すぎるから、中国には革命が必要なのだ。……直接明快に割り切つていえば、ヨーロッパの革命の目的と正反対なのだ。ヨーロッパでは以前あまりに自由がなさすぎたために、革命によって自由を争う必要があった。……中国人は今自由が多すぎるから、自由の欠点が出てきているのである。」「将来外国の列強の圧迫に抵抗できるようにするには、各人の自由を打ち破つて、ちょうどセメントをバラバラの砂の中に加えて、強固な石をつくりあげるように、強固な団体を結成しなければならない。」

その後では「この自由という言葉は結局どういうふうに使わねばならないか。もし個人に使うならば、一握りのバラバラな砂となつてしまふ。いかなることがあつても、もはや個人の上に使つてはならぬ。国家の上に使うべきものである。……国家が自由に行動できるようになれば、中国は強大な国家となるのだ。そして、このようにするには、みんなが自由を犠牲にす

る必要がある」ともいつている。

これはさすがに中国を描いて、的を射ていると思われる。そして毛はこの孫文の土法的思考をそのまま継承しているのである。毛は「自由主義に反対す」というが、これまた中国以外の共産主義者がいう色あいとは異なっている。中国独自のニュアンスを含んでいるのである。同じことを『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』（一九五七・二）でもいつている。

「人民の内部には、自由がなくてはならないし、規律もなくてはならない。また民主がなくてはならないし、集中もなくてはならない。こうした民主と集中の統一、自由と規律の統一こそ、われわれの民主集中性なのである。」ここでは「見自由と規律が同一平面上に置かれているように、実際は規律と統一と集中に力点が置かれている点では同じである。「人民は広範な民主と自由を享受するが、同時にまた社会主義の規律によって自分自身を拘束しなければならない」といつている。毛沢東共産主義がことさらに権力主義を標榜する原因は、ここにあるのである。

毛共産主義が世界の共産主義に比して、著しく倫理的である所以もここにある。中共のモラリズムは先にアナキストにおいて先例をみるわけであるが、同じモラリズムでもその方向において決定的に異なる。アナキストにおいては、あくまで自己自身の個人性を強めるための外延

性として働いているが、中共においては反対に自己自身の個人性を抹殺するための内延性として働いている。孫文のいうセメントである。中共のモラリズムは日本人が考えるように必ずしも高遠なものではなくて、極めて現実的な有効性を發揮する道具としてのモラリズムなのである。(例えば兵士をなぐってはいけないという場合、それはいわゆるモラルであると同時に、内部を固めるための、極めて効果的な方法論であることに留意する必要がある。)

中国歴代王朝がしばしば治山治水の大工事を行なうのも同じ趣旨による。治山治水は中国土壤の特質性から如何にしても避け得ないものであるが、同時にそれは王の權威と治政の要諦を現わしていたのである。漢文化は大黄河水系に發達したが、工事は中央の統一的計画の下に、集権的な力をもって行なわねばならないものであった。しかも人員の大規模動員によって、事実上共同体秩序の安定に役立っていたのである。同じことを今日の毛共産主義は行なっている。一九五七年の冬から五八年の春にかけて、中国が水利事業に投下した労働力は、人口一億人以上に達するといわれる。人民公社化による余剰労働力は、大半治山治水の土木工事に振り向けられているといっている。そのことによって、生産性と共に、中央政府の統一性と共同性が同時に保証されているのである。

## (2) 毛沢東共産主義の前近代性

毛共産主義の権力的性格をいう場合には、毛自身の出身・環境・教養・性格等の個人的特性をも併せて考えておく必要がある。毛は少年時代しばしば父親と衝突しているが、父親は湖南の典型的家父長的人物であった。その息子である毛沢東もまた、父親に対しては批判的であるにしろ、自身家父長型人物の血筋を引いている。そうでなくとも湖南という土地は封鎖的<sup>（一）</sup>で、中国人の間でも頑固者を多く産み出すので有名である。中国人は湖南人のことを「逆毛」<sup>（二）</sup>（むじくり）<sup>（三）</sup>といっているが、毛はいわば湖南の代表的な「逆毛」である。

毛において特に注意せねばならぬのは、その古典的教養である。毛のやり方の中に、マルクス主義の側からではどうにも判りにくい部分があるが、それは毛の接した古典に照してみると理解できることが多い。その点ではかえって毛は先人の祖述者の模倣的一面が濃い人で、調べさえすれば判ることが多い。その意味で日本でも、毛における古典の研究が大いに必要がある。中でも湖南の学者、王船山（一六一九—一九二）の学問が明らかにされねばならない。毛は学生時代、長沙の船山学社の積極的な一員として、親しく王の思想に接していた。

この王は普通民族主義の先駆者とされているが、彼は例え意識的でなかったにせよ、新しく生れた中産階級の利益の擁護者であった。そして中産階級の利益は儒教的な文人官僚によってよりも、むしろ絶対専制主義によって庇護を受けるであろうことを本能的に直感していたのである。

人本主義者である王は人間を蟻に例えて、次のようにいつている。「蟻でさえその蟻塚を支配する指導者を持つ。……ちようどそのように、国には君があつて将来を憂え、その国境を保護することの重要性を思わなければ、天下に尊ばれ、秩序を守らせることはできない」(『黄書』)。集団の保衛者としての専制君主を認めていたのである。毛は漢の武帝を尊敬していると伝えられているが、この背景にも王がある。武帝の征戦は当時においては有害だったかもしれないが、民族史の観点からすれば、高度に福祉的な行動だったとしているのである。この王の専制主義的発想を典型的に示すものが、軍制の必然的発展の肯定で、彼はいわゆる「兵を農に寓す」るの民兵(農民軍)の編成を考えていたのである。

かつて毛と長征の途上、袂を分かつた張国燾は、毛のことをあつさり皇帝思想だといっていたそうである。毛の皇帝思想を表わす例証としてよく引かれる詩に、「雪」(一九三六・三)がある。彼はこの中で秦の始皇帝、漢の武帝、唐の太宗、宗の太祖、ジンギス汗を詠み込んで、今

朝と比較している。これを拡大解釈して、自己自身を皇帝になぞらえているとする者がある。確かに毛の中枢部にはそのような皇帝思想が潜んでいると思う。ただしそれは極めて土法的な思索からするものであつて、政治方法論としての皇帝思想といえるものである。毛自身はスノに、中国における個人崇拜の必要性を述べているが、そうした際の毛のことは多分に必要悪的な、自己的であるよりは他者的なニュアンスが濃いのである。

むろんそれは毛自身の性格とも関係する。毛の帝王学の土台は彼自身の禁欲主義的、ピュリタンの性格から発するもので、その限りでは毛は道家というより多分に儒家の徒であるといえる。孔子はいう。「土道に志して悪衣悪食を恥ずるものは未だともに議るに足らざるなり」と。毛の青年時代を知っている人は、その苦行僧的生活態度に誰しも感嘆させられるであろう。毛は最初第四師範に入学した時学校からラシャの制服を支給されたが、彼はそれを卒業まで着つけている。白い安木綿のズボンは、ほとんど四季を通じてはいていた。「一文なしで天下を憂える」の士大夫意識が生活態度の基をなしている。士大夫意識から皇帝思想まではさほど遠くはないのである。

毛共産主義における前近代的性格を語るに際し、現代中国の基底をなす人民公社の前近代性にも触れておく必要がある。人民公社は一見世界の最も尖端的集団のようにみえて、その反

面、前近代的な性格が如実に窺える。林道義はスターリニズムの歴史的根源を求め、社会主義集団としてのコルホーズを問題としている。コルホーズはその根本において、ツァー時代のミール共同体を引継いでいるもので、スターリニズムはそうしたコルホーズにおける前近代的特性によりかかって、計画経済と個人崇拜を強行したという。人民公社とコルホーズとは内容がかなり異なるが、前近代的共同体の利用という点では、似ている。

また、中国は、村落を基礎とする家と家父長の破壊には力をつくした。革命後間もなく、一九五〇年十二月「郷人民政府組織通則」によって、行政区分上の村は消滅している。その代りに居民小組が直接国家の指令を受けることになって、従来の村はすっかり変貌を遂げてしまった。(現在「村」というのは単に慣習上の呼び方にすぎない。)その中で、家と家父長の存在意義も大きく失われていったことはいくらまでもない。現代中国では例え親でも、反革命分子ならば告発することが大きな名誉とされているが、伝統中国の中での親の地位を考えれば、まさに革命的なモラルの推奨ということになる。

しかし中国の村落は地域村落ではなく、同族の血縁村落である。これは訪中の際聞いた話であるが、今でも新村をつくる時にはほとんど同族のもので構成するという。血縁ぬきにしては中国社会を考えることはできない。それだけに血縁共同体としての前近代的特性を濃厚に残存させることになる。(文革中、劉少奇のような人ですら縁戚のものをかばって批判された。)また人民公社という組織は権力と生産の上層組織であって、村を単位とする住居等の下層条件を変えたわけではない。人民公社を構成する公社員は従来通りの生えぬぎの農民であって、他から移植されたものではない。そこにむしろ人民公社が存続する理由があり、ソ連側が例証として批判するコンムーナとは決定的に異なるのである。

家においても新婚姻法の下に婦人の地位が男子と平等となり、家の内容は決定的に変わった。しかし従来の家の構成は変えられたわけではない。

中国では依然として同堂(一緒に住む)が奨められており、核家族化が許されていない。それを彼らは「親が子に学び、子は親に学ぶことはいいことだから……」と説明するが、実際は政府が、核家族化による農村の共同体制の失われることを恐れているものと推される。農村の核家族化は分業の発達と共に行なわれるというが、農村のいつそうの総合化を目指す中国としては、核家族化を押し進めることは禁物である。ここでは、断じて個人主義化↓自由化は許されることではない。核家族化は個人主義を促すのである。こうした前近代的家族制度にあっては、そこにおけるモラルも前近代的なものである。性の自由化もきつい御法度となっている。尾崎秀樹によると、現中国には姦通罪に匹敵するものがあり、罪刑は十年位という。W・ライ

ヒは性の自由化と中央集権体制を併立して論じたが、中国ではライヒの理論がそっくり当てはまることになる。(中ソ論争でも、中国側の批判として、性の問題がからんでいる。そのソ連をライヒは統制的であると批判している！)

このように中国の人民公社は、史上はじめての地縁共同体として、伝統的血縁共同体とは全く対立するものでありながら(その意味でコンムーナの的である)、非常に前近代的共同体体制を内包している。それは容易に消滅できぬ現実としてあり、同時にそのことよって体制が保たれている。ある五世同堂(五世代同居)の長にその秘訣を問うたところ、忍の字を百書いてみせたというが、現代中国もまた新しい忍の字を百要求している。共同体を維持するためには仕方がないのである。人民公社からは、近代的な個我が生れる余地はまずない。劉少奇の「三包」(三つの自由、一つの受けおい)政策が否定された理由の根は深いのである。農村の半封建体制の地盤が、一方では社会主義化を防げると同時に、他方では社会主義計画経済を支え、個人崇拜を産んでいる点で、ソ連と中国は似かよっているのである。そこに中国がスターリンを擁護する理由がある。

### (3) 半封建制と共産主義の中の民衆

マルクスは資本主義の爛熟の結果、必然的結果としての社会主義を予測した。しかし今のところ社会主義は後進国革命としてしか実現されていないので、いずこも似たような共通の現象を持つている。それぞれの国によって社会主義は異なり、ことにユーゴスラビアと中国の在り方は特殊とされているが、それにしても基本的なところで似かよっている。共産主義批判としては、自由がない、官僚的である、何もかも画一である等々が指摘されるが、中国においても同じである。中国においては、伝統的にアナキステイックな傾向を内包しているために、共産主義の欠陥とされる特徴がいっそう露わになる面すらある。

いわば共産主義は現代の儒教である。歴代皇帝が国教として必要としたものは、道教ではなくて儒教である。中国民衆支配のためにとるべきは中核・固定・原理であって、その反対のものではあり得ない。その結果、画一、形式、模倣の何がしかの副次的欠陥が現われるとしても、それをとらないよりはいいのである。しかしそうはいいつつも欠陥は日増しに増殖し、やがて体制そのものの命取りになる可能性がある。そこで再び革命が起きる。しかしわれわれが



訪中した文革後の時点においても、革命の行なわれ方そのことにおいてやはり画一・形式・模倣の同じパターンを感じざるを得なかった。

青年にいつ結婚するかと聞くと、南から北までみな女は二十五、男は三十と答える。(実際は二十五歳以上、三十歳以上ということであるが、下部へ来るとそのように固定化されて表現される。)しかし現実には全部が全部五歳差で結婚できる筈もなく、上海の江湾人民公社の一新婚家庭では、婿殿が「私たちは政府の晩婚奨励に基づき妻は二十六歳、私は二十八歳で結婚しました。」と答えたのには苦笑させられた。ちょうど各界の連合が成功した時期だったので、いかに成功したかを聞くと、いずこにおいても「己れ一人が革命家だと思っていた」という反省を聞かされることになる。己れ一人が革命家で、他は反革命家だと思っから、なかなか連合が成功しなかったというわけである。ことばかりでなく、質問に答える際の方法や顔の表情、仕草まで似ている。ことにそうした社会主義の副次的欠陥が現われるのは、小学校教育の場においてである。

もともと学校というものは社会的にはパブリックなものであるが、手続きとしては甚だブライヴェイトな存在である。したがって授業参観などというと、教室全体が硬化反応を起し易い。中国の小学校ではことにその感を深くしたことである。教室へ入った途端に、ピンと張り

つめたものが感じられる。コソコソ隣同志でおしゃべりしているような生徒はまずいない。先生は緊張し切った顔で一心に生徒を教えている。しかもその教え方は、数学ならば地主の利息取立の計算であり、音楽ならば毛主席賛歌であり、体育ならば手榴弾投げの訓練である。一緒にいった某氏は驚いて、これは小学校というより小革命家の養成所だな、といていた。しかしここまではまだいい。というのは例え革命家養成であろうと、本来の教化目的と合致するのであるから。問題は美術教育である。絵の時間には、生徒は、先生が黒板に描いた日本人労働者が鉢巻きをしめてこぶしを振りあげている絵を、そのまま全員が同じように写しとって描いている。書では、驚いたことに、日本にも以前あった縦横斜めに黒線の入った敷紙の上を、なぞって書いているのである。そこに何ら、教育上の疑念を抱いているようすがみえないのには、がく然としたことである。

こうした画一性、非創造性、形式性は全中国を覆っているといっている。そこに文革が生れる地盤がある。文革のあの毛すらも驚いた民衆のエネルギーは、実は自由への渴望のエネルギーであった。民衆は右左に拘らず、抑圧社会そのものに対して反抗しているのである。それを最も鋭敏に受けとったのが多感な青少年たちということであった。従って毛は自分自身にも向かうエネルギーを、劉少奇批判という形ですり変えてしまったともいえる。同じパターンは、

「百家争鳴」と「反右派闘争」においてもみられる。一見両者は方向を異にしているようにいて、期するところは同一であった。要するに自己の人間的欲求が満たされないがための、破壊の情熱とその調整（弾圧）である。

半封建性と共産主義という名の（意識）の間でサンドウィッチになった民衆は、次第に活力がなえ、無気力の海に沈んでゆくのは止むを得ないことである。中国民衆は伝統的に他人事に対し、無表情、無関心なところがあるが、（そのアンビバレントな心情が怒濤のような革命性である）今日の中国においてはそれが増幅強化されている面がある。中国指導部は確かに民衆の自発自生を願っているのだが、それは指導ぬきにしてはあり得ない。自由は必要だが、「この自由は指導のある自由」（「人民内部の矛盾」）でなければならぬ。しかし西欧人ならば、指導そのことにおいて、すでに自由とは感じない筈である。（西欧人のみならず中国人においてもほぼ同じであろう。）

むろん民衆の中には活気に満ちた面がある。しかしそれはしばしば指導された（つくられた）活気である。その典型的な例を、われわれは車中で幾度も体験した。中国の夜汽車はいずれも満席であるが、その間をわれわれは数輛もぬけて食堂車へ向かうのである。その時の彼らの黙々とした注視の圧力は大変なものである。私は『阿Q正伝』の中の、処刑を見物している民

衆の眼をその時感じた。それはまさに中国伝統的民衆の虚ろにして、恐ろしい眼であった。そうした民衆が、今度は帰りがけに、一勢に拍手を送ってくれるのである。どの車輛でも一人残らず手を叩いている。気のいい日本人はたちまち顔の筋肉をゆるめて、初めの緊張感を忘れて、途中で乗客に握手を求めたりするのである。ここに指導されるものでしかない民衆があることを忘れてはならない。

ただしそのことを毛は知っていて、スノーに三種類の民衆がいることを語っている。「その第一は誠実な人々、第二はご時世に身を任せて、他人が（万歳）を叫べばそれに従う人々、そして第三は偽善者だ」という。第一、第三は少数であって、大半は第二の人であろう。一部に熱狂的なものがあれば、その周辺はしばしば反比例的に無気力・同調化することは、人間集団の行動法則である。学校のクラスは全体の一部の生徒によって動かされるともいう。要するに指導者如何によってひどく左右されるのが民衆の半面の真実である。まして中国のような歴史的に新皇待望のメシア思想の濃い土地は、絶えず現朝の動向に影響される。それを知っていて、また毛は指導性をことさら強調するのである。党は「専制主義者は人民が愚かだった方が都合いいが、われわれは人民が聰明だった方が都合いい」（「紅旗」という。だが、それは毛共産主義をはずれては成り立たないものである。中国ではマルクス・エンゲルスの論文を読むこと

すら、政治状況によってしか可能でない。

煎じつめていうと、毛共産主義のやり方は、歴代王朝の絶対権力性と愚民という形をいくらか抜けていないということになる。抜けていないというよりは、その伝統的統治技術を利用しているのである。そしてそれが許されるのはただ一点において、つまり「人民のため」に他ならない。「人民」は神様の存在であり、神様のためにはその要求をも退けることが可能であるのが共産主義である。そこには奇妙な逆転が生れている。老子は「絶学無憂」（学を絶てば憂なし）といったが、毛は「余り本を読むな」という。両者とも農村を背景としているために、このようなことがいえるのである。農村ではなく都市を背景にすると、そのようにはいえない。あるいは現在孔子が極端に批判されているのも、老子が農村的自然を政治の根本としたのに対し、孔子は都市的文化を基底としたことと関連あるのかもしれない。毛にとって既存都市は敵である。

#### (4) 「政治優先」の矛盾

結局のところ中国はその必然性からする強権によって、多くのことを成し遂げた。しかしそ

の強権によって、一方でまた、次第に沈澱しつつある多くの矛盾も産みだしているのである。われわれが訪中した際には、ことごとく「政治優先」が叫ばれていたが、それはそれで大に意味のあることであった。具体的には中国のように機械生産の遅れた国では、農村の生産性を上げようとすれば、あとに残るものは人力でしかない。自分の直接利益になるでもない人民公社の収穫率を高めるためには、どうしても「破私立公」を叫んで、その政治性に訴えかけざるを得ない。事実政治性の高い地域ほど収穫高は多いのである。毛は自信をもって、唯武器論批判の延長戦を行なった。

しかしそのことのもたらす悪もある。私の体験した例では湖南の「毛沢東記念館」で、毛には賀士貞というかつての妻がい、ないことを発見した。江青の前妻である賀士貞については、スノーがその著『中国の赤い星』の中で肖像入りで紹介しているし、スメドレーも記している。

（スメドレーは一度賀士貞とつかみあいのケンカをしたといわれる。）しかし記念館の説明員はガンとして、そのような資料は国内的にも、国際的にもないといわれた。それは恐らくは現在の毛を傷つけないがための政治的処置であろう。（毛と長征を共にした賀は、その後ソ連へ送られた。一時自殺説が流れたが、現在は変名で江西省の革命委員会副主任として活躍している。）

もう一つ。これは武漢の医科大学を訪問した時のことであるが、ここでわれわれは例の針麻酔手術なるものを実際を見せてもらった。針麻酔によって眼の角膜をとったり、腹中の大きな腫瘍をとり出したりするのである。極めてむずかしいとされている、喉頭部の腫瘍を摘出する手術もあった。この第三例について、同行した外科医がこれは診断が違っているとしたり。逆に極めて容易な手術なのだそうである。そのことを直ちに医科大側の教授に、図解入りで説明すると、あの教授は恥ずかしそうに肯定していたのである。多分ここにおいても訪中団に対する「政治優先」の立場から、誇大に表現されたものと解される。しかしそうすることで知識の歪曲、科学をもひん曲げてしまう非学問性に彼らが、あまり気づいていないふうなのは恐い気がした。

毛はどうせ中国を批判するものは、遅れた部分を誇張して言うのだから言うに任せておけ、とさして意に介していないようである。しかし一事が万事というように、部分は絶えず全体を現わしているものでもある。部分に現われている本質性をみることなくして、社会改革もまたない。一般論として過剰なものは、つねに誤謬を含んでいると思えばいい。例えば毛は「六億の神州」といういい方をする。しかし人は神でもなければ動物でもない。それをむりやり神とするところに過剰があり、無理が生れる。訪中者は忘れたものが必ず戻ってくることに感嘆す

るが（中には日本まで追いかけてくるものもある）、しかし実際問題として旅行者として迷惑なこともある。何しろ捨てたものまで戻されたりするので――。列車内のチリ一つ落ちていない清潔さというものも、ある意味では異常である。そこにこの国の徹底した権力状況といったものを垣間見ないわけにはゆかないからである。しかもその徹底権力において、中国は存立していられる。

中国というと今でも私がふつと想い起すのは、あの広東や長沙の復原された農民講習所や第一師範校の建物であり、たまたま夜まぎれ込んだ上海の弄堂（横町）の群衆の熱気である。前者は如何にも生気のない乾いた記念碑的建物であり、即ち中国のミニマンタリズムを象徴している。それに対して後者は、縁台将棋に夢中になっている人々の、黙々として裡にはらんだ活力の発散である。静と動のこれら両者が激しくぶつかりあい、時には血祭り騒ぎを起しながら、均衡状況を呈しているのが、今の中国社会の実態ではなからうか。